判決年月日	平成20年5月29日	担当部	知的財産高等裁判所 第1部
事件番号	平成19年(行ケ)第10383号		
<p>「ルネッサンスホテル創世」との出願商標につき、他人の業務に係る役務と広義の混同を生ずるおそれがあるものに当たらないとされた事例</p>			

(関連条文) 商標法4条1項15号

本件は、指定役務を「宿泊施設の提供」とする「ルネッサンスホテル創世」との原告商標が商標法4条1項15号に該当するとしてその登録を取り消すべきものとした異議の決定の取消しを求めた事案である。

本件の主な争点は、「RENAISSANCE」、「ルネッサンス」又は申立人商標3(Rの文字をデザイン化した図形の下に「RENAISSANCE」の欧文文字を大きく、かつ、ゴシック体風の太字をもって表示し、その下に「HOTELS & RESORTS」の欧文文字を小さく表示した標章)の商標を有する登録異議申立人の役務との関係での、原告商標の商標法4条1項15号該当性の有無である。

判決は、「本件商標から生ずる『ルネッサンス』との称呼、観念は、申立人商標『RENAISSANCE』又は『ルネッサンス』及び申立人商標3から生ずる『RENAISSANCE』と称呼、観念が同一であること、本件商標の指定役務は『宿泊施設の提供』であるのに対し、申立人商標の指定役務は『宿泊施設の提供』等であり、また、申立人はホテル業者であって、その取引者、需要者に共通性があることが認められるが、他方、我が国において、『RENAISSANCE』及び『ルネッサンス』の語は極めて一般的な語であり、類似の『ルネッサンス』等も含め、法人名その他の固有名詞等において、単独又は他の語と組み合わせで多数使用されており、その自他識別機能、出所表示機能は弱いといわざるを得ないこと、

本件商標の登録出願時である平成16年及び登録査定時である平成17年時点において、申立人が経営にかかわる『ルネッサンスホテル』は全国に散在する5軒しかなく、我が国における『ルネッサンスホテル』の紹介も、海外旅行者向けの出版物等が中心であって、国内所在の『ルネッサンスホテル』に係る全国規模の出版物やウェブページでの紹介等もそれほど一般的で多いものではなかったとはいえず、国内所在の申立人関与による『ルネッサンスホテル』の『RENAISSANCE』又は『ルネッサンス』との名を付しての営業期間が平成16年時点までで約17年から約9年というもので長い歴史を有するというほどのものではなかったことなどに照らすと、そもそも、国内に散在した上記5軒のホテルにつき、同一グループに関連するものであるとして広く理解されていたとは考えにくく、国内旅行者等において、申立人が経営にかかわるホテルについての『RENAISSANCE』又は『ルネッサンス』の標章が相当程度認識されていたとまではいえない状況にあったものであること」の事情等から、本件商標の登録出願時及び登録査定時において、「本件商標を『宿

泊施設の提供』に使用することにより、その取引者、需要者である国内旅行者等において、原告の『宿泊施設の提供』という役務が、申立人の『宿泊施設の提供』等という役務と緊密な営業上の関係又は同一の表示による事業を営むグループに属する営業主の業務に係る役務であると誤信されるおそれ（広義の混同を生ずるおそれ）があったものということとはできない。」とし、決定を取り消した。